

世界短編名作選 ラテンアメリカ編

監修 蔵原惟人



新日本出版社

世界短編名作選

ラテンアメリカ編

監修 蔵原 惟人

編集 大久保光夫

神代 修

里見 三吉

世界短編名作選 ラテンアメリカ編

1978年1月30日 初版

定価 1200円

1982年12月10日 第2刷

監修	蔵	原	惟	人
編集	大	久	保	光
	神	代		夫
	里	見	三	吉
発行者	松	宮	龍	起

郵便番号151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3の11の8

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京 (478) 3311 (代表)

振替番号 東京 3-13681

印刷 享有堂印刷 製本 小泉製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

世界短編名作選

ラテンアメリカ編

目

次

酒つくりの男たち	キローガ／徳永瑞夫訳	5
谷間の星	ガリエーゴス／田村さと子訳	21
ミルク・カップ	ローハス／大久保光夫訳	35
オセロットルⅡ	アストウリアス／岸本静江訳	45
33		
大と逃亡奴隷	カルペンティエール／神代修訳	67
渴	イカーサ／山蔭孝夫訳	79
き		
瘡	ギマランエスⅡローザ／高橋都彦訳	101
報復者	アルゲーダス／上谷博訳	123
ゲームの終わり	コルターサル／米谷洋子訳	137
湿地帯で	カルドーソ／神代修訳	151

捕 虜	ロアⅡバストス／大久保光夫訳	163
燃える平原	ルルフォ／杉山 晃訳	173
あとは密林だけ	ベネデッティ／岸本静江訳	189
夢 の 王	アレクシ／里見三吉訳	215
この村に泥棒はいない	ガルシアⅡマルケス／蔭山昭子訳	231
チャック・モール	フエンテス／蔭山昭子訳	257
パン屋のはなし	ネイポール／宮本正興訳	269
決 闘	バルガスⅡリヨ－サ／山蔭孝夫訳	285
解 説	神代 修	299

酒つくりの男たち

キローガ
徳永瑞夫訳



オラシオ・キローガ（ウルグアイ）

（一八七八～一九三七）

作品はいずれも短編で、『愛と狂気と死の物語』（一九一七）、『密林の物語』（一九一八）、『アナコンダ』（一九二一）、『砂漠』（一九二四）、『首を切られためんどりとその他の物語』（一九二五）、『被追放者』（一九二六）、『もっと向うに』（一九三五）などの作品がある。

その男は、ある日ふと昼どきに姿を現わした。どこから、どうしてやって来たのかは、誰も知らない。男は、イビラロミーの安酒屋の店という店を飲みまわっていた。誰も飲んでいような者はいなかった。リベットとファン・ブラウンは例外だが。

男のいでたちは、バラグアイの兵隊ズボンに、靴下なしのままのつっかけ、それに、あかだらけの白ベレーを^{まぶ}深くにかぶっていた。男はただ飲むだけで、ほかにすることといえば、持っていたつえをしきりに自慢しながら、その、皮をはいだ裸の棒でつくったつえを百姓たちにさし出して、折れるかどうかためしてみろ、と言うのだった。百姓たちは、ひとりひとり、その奇妙なつえを、道路の敷石の上でためしてみたが、たしかに、どんなにたたいてもぶっつけても折れなかった。そのつえの持ち主は、飲み屋のスタンドに背をもたれさせ、足を組んで、得意そうな笑いをうかべていた。男は、翌日また同じ時間に、同じ店に、例の有名なつえをもって現われたが、そのうちに姿を消し、ひと月あまりたったころの夕方おそく、廃墟のなかの酒場から、化学者のリベットといっしょにやって来た。今

度はもう、かれが誰であるかは、みんな知っていた。

一八〇〇年ごろ、バラグアイ国政府は、かなりの数にのぼるヨーロッパの学者たちを契約招聘した。幾人かは大学教授、大部分は産業技術者だった。バラグアイは、国の病院創設事業のために、スウェーデンの新鋭生物学者エルセ博士に、その援助を懇請した。この新しい国には、博士のすぐれた力量を発揮するための広い活動分野があった。博士は、もう二十年もの間、何ら専門的なしごとをしていなかった、ある機構の病院や研究所に、五年間配属させられた。だが、やがて博士の最初の意気込みはすっかり眠らせられてしまった。令名高き学者は、この熱帯の国に、重い代償をはらったのだ。そんな外国人たちの活動は、アルコールにつけられたように燃やされてしまうのだった。転落はもうとどめようもなかった。それらしい十五年から二十年もの間、博士のことは何もわからなかった。そしてやっと、ミシオネスにいるということがわかった。兵隊ズボンと斜めにかぶったベレー帽という姿で、その生涯の最後のささえでもあるかのように、じぶんのつえの頑丈さをみんなにためさせようと見せまわっていたのだ。

この男の出現が、片手なし手棒に、この半年間ずっと描きつづけていた夢の実現をついに決意させたのだ。それは、オレンジ酒の醸造という夢だ。

この片手なし手ん棒のことについては、リベットのことにいっしょにもうほかの話で紹介したからご承知だと思うが、かれは、金持ちになるための三つの計画を同時に考えていた。もっとも、そのうちのひとつないし二つは単なる趣味でしかなかった。それに、一文の金もなく、格別な財産があるわけでもなかった。それどころか、片方の腕を、ブエノスアイレスにいたとき、自動車のクランクにとられてなくしてしまったのだ。しかし、一本の腕と、芋の煮こるがし二つと、そしてなくなった腕の切り株にとりつけたハンダごとと、それだけで、かれは世界でいちばん幸せな男だと思っていた。

「いったい何がほしいんだ？」と、片方の手をふりまわしながら、いつも楽しそうに言うのだった。

たしかに、かれは、あらゆる技術と自分の事に関して、いくらか深い知識を持っていること、その苦行僧にも似たつつましい食事、それに二巻の『百科辞典』、それが自慢のたねだったのだ。ほかに持っているものといえば、その変らぬ楽天性と、ハンダごてくらいのもので、あとは何もなかった。しかし、かれの貧しい頭は、まさに、夢がいっぱいに煮えたぎっている鍋だった。そのなかで、産業に関するさまざまな発明発案が、鍋のなかの芋よりももっとぐらぐらにわき立っていたのだ。何としてでもやりとげたい

そんな大事業のための方策が得られぬままに、かれはいつも、村人の需要にこたえる程度の小さな事業を計画したり、オルケタの湿地の水を、じぶんの家まで、濾過して給水するための、おどろくほどの素晴らしい装置を考え出したりしていたのだ。

この三年の間に、かれは、つねづね村で不自由していた焼きとうもろこしをつくる実験に成功した。さらに、木片と砂鉄の寄せ木細工。ピーナッツと蜂蜜でつくるあめ菓子。松やにを乾溜してつくる香料。また、つやつやに磨きあげたひょうたんの殻。これらの見本はお人よしの連中を狂喜させた。またさらに、ラバーチョ樹からあく出しをして採取する染料。オレンジ油の製造。こうしたことについての勉強は、エルセがやって来たときに私たちを夢中にさせたものだ。

今まで、何らかの事業の創案者で、金持ちになった者はひとりもない。そのことは注意しておくべきだろう。金持ちにならなかったのは、実はそれが具体的な形で実現されなかった、という単純な理由からだ。

「いったい何がほしいのかって？」——手ん棒はなくなった腕の切り株をふりまわしながら、満足そうにくりかえすのだった。——「まあ、二百ペソほしいな。だけど、それをどこで都合すればいいのかな？」

かれの発明は、たしかに金が足りないためにうまく行かなかった。だが、このイビラロミーでは、十ペソ借りるよりは腕をもう一本見つける方がやさしくらいだ、ということとは自分でもよくわかっていた。しかしかれは、決して悲観したりはしなかった。それどころか、さまざまな新事業の夢が、まるで狂ったように、ますます湧いてくるのだった。

ところが、オレンジ油精製の事業は、そのために手ん棒が今まで以上にマテ茶つくりの仕事場をかげずりまわったりしないでも、実現する運びとなったのだ。エルセの出現と同時に、思わぬ形で工場設置がきまってしまったのだ。

それにしても手ん棒の持っている機械器具といえば、せいぜい五、六種の道具くらいのもので、あとは、腕につけたハンダごてしかなかった。その機械といっても、その部品はどれもこれも、どこかの家から持ち出してきたものとか、誰かの持ちものだった装飾金具とかで組み立てたものだ。たとえば、ベルト式水車の水かきは、村で拾い集めた古い大スプーンを利用して仕上げたものだ。かれは休もうともせずに、一メートルものパイプや、錆びたブリキ板をひきずりながら、かげずりまわった。それを一本の手で——もう片一方の切り株も使って裁断し、ねじ曲げ、また曲げて、ハンダづけをした。信仰とも言える、かれの楽天

主義からくるエネルギーだ。

ついでに、かれのボイラーのポンプは、古くなったおもちゃの機関車のピストンを利用したものだということを、申し添えておこう。それはかれが、その持ち主だった坊やに、自分がいかにして片腕を失うに至ったか、という話を百べんも聞かせた末に、ついに獲得したものだ。また蒸溜装置のランビキは（かれのランビキは蛇管のついた普通形のものでなく、たくさんの蒸溜皿を使った大形のものだ）混り気のない錫板だ。それは、ある生物学者がマムシの研究飼育用につくらせたドラム罐からつくられたものだ。

だが何といっても、新工場設備のなかで最も素晴らしい着想のものは、オレンジしぼりの圧縮器だ。三寸釘を何本も打ちこんだ、穴あきの樽で、そのなかに木製の水平軸があつて、廻転するものだ。いがのついた樽のなかで、オレンジが回り転がり、釘にひっかけられ、飛びはねて、碎け、崩れ、やがて、精油の漂う黄色な果汁となつて、それがボイラーに送られるのだ。

かれのたった一本の腕は、その仕事場のなかでは、馬半頭分にも匹敵した。ミシオネスの日盛りの下で、夏でも、ぶ厚い黒の水兵シャツを着たままで、脱ぎうともしなかった。それにしてもやっかいなことに、例の奇妙なおもちゃ

のポンプは、いつも見張ってなければならなかった。そこで、この酒つくり技師は、ひとりの物好き男に協力を要請した。ずっと最初のころから、遠くの木のかげにかくれるようにして、この工場を観察していた男だ。

この物好き男は、マラキアス・ルビダルテという名のブラジル人で、完全に黒い、はたちの坊やだ。多分、まだ童貞だろうと、私たちは推測していた。たしかにまだその時はそうだった。だが結婚するために、ある朝、馬に乗ってコルプスに行き、三日めの夜おそく、酔っぱらって帰ってきた。後ろに、女を二人乗せていた。

マラキアスは、今はかれの祖母といっしょに、奇妙な家でくらしていた。石油箱を拾い集めてつくった掘っ立て小屋だ。それは、この拾い屋が、そのころ建築中だった三、四棟の文化住宅をつぶさに観察し、そこで得た最新の建築技術の情報にもとづいて、それをさらに発展させ改造しながら建造したものだ。新しい情報を得るたびに、マラキアスは、さらに建物を増築し、翼をひろげ、さらに高くして行った。その文化住宅の天井桟敷の突端には、五十センチの明り窓がついており、入り口は犬がやっと通れるくらいだった。この黒ん坊は、みんなにしょっちゅうからかわれていたが、そんなことには耳をかさず、ひたすら、じぶんの芸術的野心を満たそうとしていた。

手ん棒はこの芸術家に、芋を二つで、ということでも協力をもとめたが、うまく行かなかった。マラキアスは、午前中いっぱい、仕事場のまわりを、ひと言も言わずにぐるぐる回っていたが、午後になるともう戻って来なかった。そして翌朝は、また、木の間から様子をうかがいながら立っていた。

とにかく、こうして手ん棒は、甘く、渋いオレンジ油をつくりあげ、その見本をブエノスアイレスに送りどけるまでを、やってのけた。そこからの返事は、その精油は同種の輸入商品とくらべ、とても競争にはならないというのだ。その理由は、「生産過程における温度が高いからである。今回の見本に限って言うならば、圧縮に関してはまず妥協し得るが、蒸溜上の諸欠陥については、その所見は……等々」ということだった。

ということであつたが、手ん棒はそれでもがっかりはしなかった。

「そんなこと、いつもおれが言つたことじゃないか!」かれは楽しそうに切り株の手を背中にまわしながら言うのだった。「火にじかにあてたんじや、何もできやしないよ!」だが問題は、火皿の欠陥をどうするか、だ!」

もつと金のある、手ん棒よりは見識のない、ほかの誰かだったら、それでもうランビキの火を消してしまつたかも知

しれない。だが、かれは、そのつぎはぎだらけの機械を憂鬱そうに眺めていた。その、うまくあててあるつぎはぎのどれもこれもが、さまざまな代用品をつかつて修理したものばかりだった。その時ふと、手ん棒は、あの、樽から流れ出している黄色の、腐ったような汚泥は、もしかしたら、オレンジ酒の製造に使えるのではないか、と考えたのだ。かれは、醸造に関しては強くない。だが、今までに、もつともっと大きな困難を克服してきた。それに、あの化学者のリベットが力をかしてくれる筈だ。

エルセ博士がイビラロミーに出現したのは、まさに、そんな時だったのだ。

手ん棒は、リベットといっしょにいた、その新来者を尊敬していた。このあたりでは、手ん棒だけがエルセ博士の崇拜者だった。次から次に、かれのまえに立ちはだかるさまざまな障害。それでも、大『百科辞典』の崇拜者は、あの、人間離れた「元」人間と会った日のことを忘れてはいなかった。あの「元」人間のことで、どんなにかみんなが、手ん棒をからかったことか、（あの、どろぼう野郎の無学の連中がどんなにひどいことを言ったことか！）だが、あの二人は、びくともしなかった。

「もう使いものにはならん」、かれは首をふってまじめに答えた——。「だが、とても物知りだ……」

ところで、その高名な医者エルセが、村の尊敬を喪失した、ある事件について話しておこう。

かれがイビラロミーに現われて間もなくのころ、ひとりの口軽男が酒場の帳場にやってきて、自分のかみさんがどうとかこうとかして苦しがつてるから、なおしてくれるようにと医者に頼んだ。エルセは、その話をとても注意ぶかく聞いて、スタンドの上で、ぼろぼろの手帳をひっくりかえしながら、おそろしく力をこめて、のろのろと処方箋を書きはじめた。ペンが折れてしまった。エルセは、フンと笑って、今度はもっと力をこめて書きはじめたが、何にも書けぬままに紙をくしゃくしゃに丸めつぶしてしまったのだ。そして——

「わしにはわからん！」と、それだけをくりかえしたのだった。

手ん棒は、その日の真つ昼間、雲ひとつない、暑い道を、エルセといっしょに、オルケタまでの道を歩きながら、何か、とても幸せだった。そしてエルセに、砂糖きび焼酎の酵母をオレンジのしぼり汁になじませることができるかどうか、どのくらい時間がかかるだろうか、最低どのくらいの比率なのか、といったことを聞いてみた。

「そんなことなら、わしよりはリベットの方がくわしいよ」と、エルセはつぶやいた。

「とにかく——何かまず、最初につかう酵母を、よく考えますよ」と、手ん棒はくりかえし強調した。

こうしてお人よしの手ん棒は、早速、じぶんの楽しい思いつきに熱中しはじめた。

エルセは、照りかえしを防ぐため、ベレー帽を鼻の上に乗せて、めんどくさそうに、ぼつりぼつりと注釈を加えた。手ん棒は、その意見を聞きながら、直ぐにもどれかのきび焼酎の酵母をなじませる必要がある、という結論をひき出したのだ。きび焼酎以外のものを入手することは、千に一つほどの可能性がないからだ。そして、あの、しほり汁を殺菌せねばならぬこと。磷酸塩をうまく使うこと。それに、ブエノスアイレスに注文したブルゴーニュ酒の酵母を攪拌しながら入れること。時間さえかければ、なじませることができよう、ということ。だがそれが不可欠なことではないということ……。

手ん棒は、興奮と暑さでシャツの襟をはだけて医者のおかげに駆けより、

「私は幸せだ！ もう何の不足もありませんよ！」とくりかえした。

かわいそうな手ん棒！ オレンジ酒醸造のためには、絶対不可欠というのではないが必要なものが欠けていたのだ。醸造用の空き樽を、八個から十個そろえるには、戦時

中だったあの当時では、手ん棒が夜も昼もハンダづけをして働いて、半年かけてかせぐよりも、もっと多くの金が必要だったのだ。

だが、そのためにかれは、焼けた 그리스 がつまっていたり、百姓の腐った食べものが入っていたりしていた石油箱を改造するため、茶畑の倉庫のなかで、雨の日をまる一日、こもりつきりで働いたり、もう使いものにならなくなった古だるを手に入れるために、村じゅうの酒屋を走りまわったりした。そのうちに、リベットとエルセが——九十度のアルコールに関することで——協力してくれるだろう。それは、ほとんど間違いあるまい。

事実、その通り、リベットは協力してくれた。化学者だから、釘うちは全く駄目だが、その能力に応じた協力をしてくれた。手ん棒はつきつぎに古だるを割り、解体し、けずり、焼いた。どのたる板にも、指半分もの厚さに、紫色の沈澱物がべつとりこびりついていた。それをぜんぶ、ひとりでやってのけた。新しいたるを買いそろえることにくらべれば、それはむしろ軽いぐらいの仕事だった、その仕事を手ん棒は、一本と四分の一の腕で、そして膨大な時間と汗で、やりとげたのだ。

エルセの方は、酵母について記憶していた知識のすべてを提供したことで、もうすでに協力は終わっていたが、手

ん棒が、醸造の手順について教えてほしいと頼むと、この「元」学者は起き上って、フンと笑い、

「わしには何もわからんよ！」と、例のつえを、わきの下にたくしこみながら言うのだ。そして、これ以上酔えないほどひどく酔っぱらって、うれしそうに、いやらしい格好で歩きながら、出て行ってしまうのだった。

この医者生涯は、ちょうどそんな歩き方の散歩のようなものだった。靴下なしのつかかけのまま、健康そうな顔色をして、どんな小道にも踏みこんで行くのだった。酒屋という酒屋を飲みまわる以外には、一日中、十一時から十六時まで、まったく何もなかった。同僚のリベットのよう、しげしげと酒場に通うこともなかった。そのかわり、よく、夜なかになってから、「お父さん」とか「お母さん」とか名づけた馬に乗り、その両耳をつかんで、大笑いしながら走りまわっていた。そしてひと晩中、あちこちと早駈けで走りまわり、挙句の果ては、騎士の落馬で、みんなの笑いものになるのだった。

そんな、いいかげんな生き方をしていたのだが、それでも、この人間離れた「元」人間を、アルコールびたりの世界から引きずり出すことのできる何かがあった筈だ。それがわかったのは、驚いたことに、ある日のこと、エルセが村の通りをひたむきに歩いてる姿を見た時のことであ

る。その日の午後、エルセの娘がやって来たのだ。サン・ビポーの学校の教師で、年に二、三回、ずっと、父親を訪ねていたのだ。

やせた、黒い服を着た、何となくひ弱な感じの娘で、ふきげんな目つきをしていた。少なくとも私たちは、彼女が父親といっしょにオルケタの方にむかって村の道を通ったとき、そんな印象をうけた。だが、手ん棒の話を聞いて、そんな感じをうけたのは、どうやら私たちだけだったらしい。それというのも、その女教師の父親の落魄ぶりを、毎日のように見せつけられていたからなのだろう。

そんな推測は、やがて後になってから、はっきりした。娘は、とても浅黒い肌をしており、父親であるスカンジナビアの医者とは、どこといて似たところがなかった。多分、実の娘ではなかったのかもしれない。少なくとも父親の方は、じぶんの娘だとは思っていなかったらしい。娘にたいする態度、ふるまいを見て、私たちはそう確信した。だにどうして、あんな手ひどいあつかいをうけ、見離された子どもが、教師の資格を得たのか、そして、そんな父親を慕いつづけているのか、まったくわからない。いっしょに暮したいのにそれができず、離れてゆく父親の行先を訪ねて、どこまでも会いにやってくるのだ。しかも、そのエルセ博士が、酒に無駄づかいする金は、みんなあの女教

師のふところから出ているのだ。

しかしこの「元」人間も、最後の節度だけは守っていた。娘のいるところでは飲まなかった。その犠牲が、じぶんの子ではないと確信している娘への供物が、あのかわいそうな手ん棒の超科学的反応より以上に神秘的な、酵母として示現するのだ。

そんな頃、医者の方が、四日間というもの、どこにも見あたらない、ということがあった。ところが、また飲み屋に姿を現わしたときは、小ざっぱりした服を着ていた。みんな、娘が縫いなおしてくれたのだ。

その時いらい私たちは、エルセが、さわやかな、すました顔をして、小麦粉や油を買いに、急ぎ足で歩いているのを見ると、

「きっと、また近いうちに娘さんがやって来るんだらう」などと話あったものだ。

一方、手ん棒の方は、天井窓にまたがってハンダづけ仕事をつづけていた。暇があると、樽板をけずったり、焼いたりしていた。

そんなことだけではなかった。その年は霜が多かったのでもオレンジの成熟がとて早く、春の十月になってもまだきびしい夜の寒気が、発酵作用を狂わせたりしないよう、酒蔵のなかの温度のことも考えておかねばならなかった。

そのため、小屋の内側の壁に、幾束ものわらを、くしゃくしゃのまま張りめぐらせた。だから、そこは、まるで逆毛を立ててくしけずったように見えた。加熱装置も設置しなければならぬ。そのボイラーには、マムシ用のドラム罐をつかい、煙突用の、太い大竹を壁のわらの間に湾曲させながら通したので、まるで黄色い大蛇がくねっているように見えた。それに、黒ん坊のマラキアスの頑丈な荷車を借りねばならなかった。——この拾い屋をはじめほかの連中からは、酒ができれば、という約束で借りまわった。マラキアスには、山からオレンジを運んでもらうときに、もう一度お世話になった。マラキアスはもともと無口なのだが、黙々と、二人の女の苦い思い出を噛みしめながら、その仕事をやってくれた。

ふつうの男だったら途中で参ってしまっただらう。だが手ん棒は、どんなに苦しい時でも、陽気に、汗にまみれて働くという、その信念を守り通した。そして、

「何が不満だっていうんだ？ これで充分じゃないか！」と、切り株の腕を、完全な腕と同じようにふりまわしながら、陽気にくりかえすのだった。

「さあ、これでみんな、ひと財産つくろうじゃないか！」やがて、手ん棒とマラキアスは、なじませたブルゴーニュ酒の酵母を、醸造だるに移す作業にとりかかった。黒ん